

ほうこん

題字・清水英夫

GALAC・9月号・付録
2025年9月6日発行(毎月1回6日発行)
昭和43年3月8日第三種郵便物許可

〒160-0022
東京都新宿区新宿5-10-14 中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会

TEL(03)5379-5521/FAX(03)5379-5510
ホームページ <https://www.houkon.jp/>
Eメール kondankai@houkon.jp
編集・川喜田尚

第62回ギヤラクシー賞 贈賞式決算報告

―7月理事会報告―

2025年7月23日、理事会をZoomミーティングにて開催した。

1. 委員会活動報告

◇出版編集委員会 岩根副委員長
・7月14日にZoomで委員会を開催した。

・「GALAC」10月号特集は「テレビを彩る音楽コンテンツ」。巻頭は音楽シーンの新たな潮流や、5月に初開催された「MUSIC AWARDS JAPAN」が示唆する音楽番組の未来について、柴那典氏に寄稿を依頼。ケーススタディとして、「ミュージックジェネレーション」(フジテレビ)、「題名のない音楽会」(テレビ朝日)、「Anison Days」(BS11)、「ザ・カセットテープ・ミュージック」(BS12)、「billboard TOP40」(tvk)など、新旧、さ

さまざまなジャンルの音楽番組を取り上げ、各局の制作者に話を聞く。その他、「紅白歌合戦」についての放談(滝野俊一×宮崎美紀子)、「埼玉政財界人チャリティ歌謡祭」(テレビ埼玉)についてのコラム、カラオケ文化と融合した新機軸の番組について、第一興商への取材などの構成とする。表紙は石丸幹二さん、ザ・パーソンは中村耕治さん。
・11月号は「戦後80年」をテーマに内容を検討中。
◇選奨事業委員会 出田委員長
(テレビ部門) 松山委員長
・藤田多恵さんが新たに委員に加わることを理事会で承認した。
・10月22日に大阪芸術大学で「ギヤラクシー賞入賞作品を見る会」を開催予定。

・6月30日にZoomで月評会を開催した。6月度月間賞にはETV特集「断らない病院」のリアル」(NHK)、NNNドキュメント'25「コメクライシス 翻弄される日本の主食」(テレビ新潟放送網)、「沖縄戦 戦場で人々は」(NHK)、「続・続・最後から二番目の恋」(フジテレビ)の4本を選出した。
(ラジオ部門) 桜井委員長
・6月27日にZoomで合評会を開催した。「ローカルアイドルのラジオ番組」をテーマに、「松井祐香里のトップを狙え!」(北陸放送)、「fishbowlの木曜のむすびめ supported by おいしい三角形ふじ亭」(静岡エフエム放送)、「タイトル未定の金曜の予定は未定!」(北海道放送)を聴取し議論を交わした。
・7月22日にZoomで合評会を開催した。「2025年4月スタートの生ワイド番組」をテーマに、「7COLORS」(ZIP-FM)、「大島由香里Brand-New Morning」(TBSラジオ)、「藤川貴央のちようぶええラジオ」(ラジオ大阪)を聴取し議論を交わした。

・ラジオ部門の応募要項の「審査対象」欄に「地上波」あるいは「ネット配信」のみの作品は対象外」などの追記を検討している。

〔CM部門〕 家田委員長

・定例会は7月24日開催のため、報告は特になし。

・7月22日、目白大学で「CMを見る・聴く会」を開催し盛況終了した。詳細は次回理事会で報告予定。

〔報道活動部門〕 古川委員長

・報告は特になし。

◇企画事業委員会 長井委員長

・7月17日にZoomで委員会を開催し、次回セミナーについて議論した。近年はコロナ禍のためオンライン開催が続いたが、リアルとオンライン併用での開催を検討している。

・セミナーのテーマについては各委員からジャーナリズム系、メディア系など約10本の提案が寄せられた。

・開催時期は秋以降を予定。11月は放送関係のイベントが複数あるため、重ならないよう日程調整をする。

◇広報委員会 滝野委員長

・6月25日、YouTubeにインタビュー動画「ギャラクシー賞受賞者の声」掲載。

・7月2日、HP「オリジナルコンテンツ」に「座談会」2025年春ドラマまとめ編」掲載。

・Gメンバー1406人(7/22現在)。
・マイベストTV賞5月度月間ノミネートは大河ドラマ「べらぼう〜蔦重栄華乃

夢斬〜」(NHK)、「続・続・最後から二番目の恋」(フジテレビ)、火曜ドラマ「対岸の家事〜これが、私の生きる道!〜」(TBS)に決定した。

2. その他

①入会・退会の件

〔正会員入会〕 藤田多恵さん

〔正会員退会〕 小玉美意子さん

②第62回ギャラクシー賞贈賞式・懇親会
決算

事務局より決算報告を受けた。支出は約1440万円となり、会費収入と審査料収入を原資とした。賞状額や賞状用封筒の制作年あたり、昨年より+25万円程度支出が増加した。

③その他

・日韓中制作者フォーラムが12月9日〜12日、北九州での開催が決定した。

今後の会議スケジュール

8月休会、9月24日、10月28日

〔出席〕 音好宏、川喜田尚、出田幸彦、桜井聖子、桧山珠美、家田利一、古川柳子、長井展光、滝野俊一、市村元、岩根彰子、風間恵美子、国枝智樹、小林毅、仲宇佐ゆり、丹羽美之、山田健太、中島好登

会議記録

〔7月〕

14日

22日

23日

24日

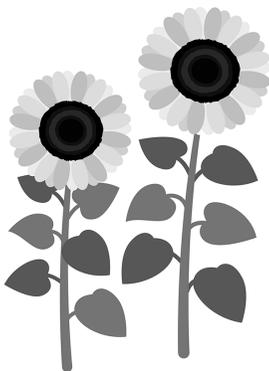
31日

出版編集委員会

(選奨) ラジオ定例会
理事会

(選奨) CM定例会

(選奨) テレビ月評会



音声に携わる身として

佐伯帆乃香

2015年にオトバンクに入社し、オーディオブックやポッドキャストの広報を担当しています。このたびご縁をいただき、ドキドキしながら参加させていただいております。

高校時代は放送部に所属し、校内放送で好きな音楽や言葉をお届けする時間が好きでした。今は、ラジオそのものではないものの、音声コンテンツの世界に関わっていることを嬉しく思っています。

入社したころは、radikoの普及もあり、ラジオをスマートフォンで楽しむ習慣がすでに根つき始めていた時期だったと記憶しています。

一方で、音楽やラジオ以外の音声コンテンツは、まだまだ普及していませんでした。それがコロナ禍やワイヤレスイヤホンの普及を経て、ラジオをはじめとした音声コンテンツ全体への注目が一層高まってきたように感じています。

これから自分自身も学びながら、少しでもお役に立てたら嬉しいです。

新入正会員自己紹介

メディアビジネス研究継続中

鈴木克実

新卒で地方独立テレビ局に入社、その後、全国放送ラジオ局、衛星放送（CS）報道専門テレビ局の計3社で、放送業務に携わってきました。放送局一筋37年を過ごしてきましたが、会社勤務のかたわら大学院2校に通いMBAや博士号を取得、昨年、定年退職を迎えました。

今春から大学教授として専門の経営学を教えつつ、他大学では客員講師としてマスコミ論を担当しています。放送局勤務時は、各局において広告営業、番組制作、報道記者、ニュースアナウンサー、イベント制作、番組編成、視聴者センター、CM進行、考査業務、送出技術、DTH・CATV営業など、放送実務全般に携わってきました。

テレビとラジオ、全国と地方、系列と独立、地上波と衛星波、外資と国内総合編成と専門編成など相反関係にある組織で、放送番組を視聴・聴取し続けてきました。私のようなキャリアは珍しいと考えます。これらの知見を活かし、活動に貢献できれば幸いです。

公式ホームページの正会員ページ、 情報更新にご協力ください！

会の公式ホームページには、正会員一覧と会員情報を掲載中です。情報が過去のものとなっていっしやる方は、更新の手続きをお願いいたします。事務局あて、変更内容をメールでお知らせください。

回答先アドレス kondankai@houkon.jp



ホームページ正会員一覧

追悼 小玉美意子さん

小玉美意子さんが2025年7月11日逝去されました。82歳でした。小玉さんはギャラクシー賞報道活動部門の初代委員を務め、また、当会が90年代にローカルニュースの研究を先駆けて行った「ローカルニュース全国機構」の実行委員を務めるなど活躍されました。その功績に心から感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

小玉美意子 こだま・みい
1942年東京都生まれ。65年お茶の水女子大学卒業、フジテレビにアナウンサーとして入社。当時の女子アナウンサー定年制により71年退社し、翌72年よりアメリカ留学。フリーアナウンサーを経てお茶の水女子大大学院人間文化研究科博士課程満期退学。福島女子短期大学、江戸川大学を経て95年より武蔵大学社会学部教授、2013年より名誉教授。東京メトロポリタンテレビジョン番組審議委員、日本マス・コミュニケーション学会理事、映倫青少年映画審議会委員長などを務めた。専攻はテレビ・ジャーナリズム論、ジェンダーとメディア論。著書に『ジャーナリズムの女性観』『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』など。



photo / Koto Nakajima

シンポジウム、勉強会、講演会。いずれの時も、たおやかな笑みを浮かべてはつきりした声で丁寧にお話をされた、そんな姿が思い出される。

訃報に接し、最終講義をまとめた「体験から研究へ…メディア+ジェンダー研究の40年」(2013年3月2日)を読み返した(以下、カッコ書きの引用は前掲書)。1965年、フジテレビにアナウンサーとして「トントンと6次試験まで」通り、合格された。「そこから先が問題です。合格したアナウンサー7名が集められて人事部から説明を受けたところ、『男性は55歳定年です。女性は2年働いてアナウンサーに適していればもう2年働けます。適していなければ後の2年は事務職で働いて頂けます』とのこと」。この「女性アナウンサーの若年定年制」を取り除くため、辛抱強く話し合い運動を続けた結果、「4年経った時、会社と本人の双方が望めば、あと2年だけ延長できることになりました」。73年まで続いたフジテレビの女性25歳定年制を解消する原点到小玉さんがいたことがわかる(私は今回のフジテレビ問題の一因として、この男尊女卑体質があると思っています)。「そういえば入社試験で、報道関係の仕事がしたいと言ったら、『ええ？女の子に報道は無理でしょう』と言われたのを思い出しました」とのエピソードも披露されている。

その後フリーとなり、勉強の末、1972年サンフランシスコ州立大修士課程(放送学)に入學。

同年の米大統領選、ウォーターゲート事件を目的に、テレビジャーナリズム研究に進み、74年、米CBSとNHKニュースを比較した修士論文「日米テレビニュース比較研究」を書き上げる。このテレビニュース比較は帰国後の84年調査でTBS、94年調査でCNN、2000年調査では英BBC、ブラジルのGloboを加え、アジア・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカを比較、研究を重ねた。この成果は『テレビニュースの解剖学―映像時代のメディア・リテラシー』(2008年3月、新曜社)に結実する。

一方、フジテレビでの女性差別体験、留学中の第一回世界女性会議(1975年)への参加を原點として「メディアとジェンダー研究」を確立していく。メディア界のみならずマスコミ研究も男性中心だった時代に風穴を開けたGCN(Gender and Communication Network)を中心にジェンダー研究を進められた。

放送番組向上委員会、映画倫理委員会の委員、民放連、放送批評懇談会などの賞の選考を歴任し、「テレビ探点サイトQua」の試み、「3・11」報道分析につながる福島女子短大赴任時の体験などを生かした『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』(2012年4月、学文社)など、小玉先生の研究は多岐にわたる。そのすべてに共通しているのが、弱い人の側に立った視点であった。そして、たおやかさだった。

3年前、学部長になった私にかけてくれた声が忘れられない。「自分だけで背負ってはダメですよ。みんなを巻き込まないよね」。改めて、その言葉を心に刻みながら、ご冥福をお祈りしたい。

(砂川浩慶/立教大学社会学部学部長・教授)